

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：33921

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12298

研究課題名(和文) 文人旗本三橋成烈の伝と文事の研究

研究課題名(英文) Research on the Life and Works of MITSUHASHI Nariteru

研究代表者

ワクダ マサキ (WAKUDA, Masaki)

愛知淑徳大学・文学部・助教

研究者番号：40780169

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代中期の旗本で、和歌・漢詩・俳諧の詠作や教訓本・読本の述作、古典籍・古書画の書写収集と、寡作ながらも多彩な学芸活動を繰り広げた文人、三橋成烈(みつはしなりてる、1726～91)の伝と文事について、調査考証を行い、以下のような成果を得た。

(1) 成烈が安永期(1772～80)の大坂在番中に江戸在住の親族朋友と交わした往復書簡集『飛檄(ひげき)』『飛檄随筆(ひげきずいひつ)』の成立や伝来を明らかにし、重要な記事の紹介を行った。

(2) 成烈が四十二歳の明和四年(1767)に大坂で世に出した、女子向けの教訓本『童女/教訓 松間鄙言(どうじょきょうくんしょうかんひげん)』の翻刻および注釈を公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1) 成烈書簡集の校注作業を、遅々とした歩みではあるが、進めることができた。書簡には、成烈の人物像・交遊圏・読書歴はもちろん、当時の政治・経済・社会・歳事・風俗・芸能など、多岐にわたる情報が書き留められている。今後も校注作業に取り組み、学術資源の共有が図れるように努めたい。

(2) 『松間鄙言』は、成烈にとって最初のまとまった著述で、書中には、大坂上宮の神主で文筆家の大神貫道が著した跋文や、東西の画家十一名が描いた挿絵十六図が収められる。成烈の文業の推移変遷をたどり、その創作の主意や手法の具体的な様相を探る上で、また、上方・江戸、双方での人物交流の実態を明らかにする上で、重要な資料となり得る。

研究成果の概要(英文)：This research worked on the collation editing of MITSUHASHI Nariteru (1726-1791)'s "Higeki", "Higeki zuihitsu" and "Dojo kyokun shokan higen". "Higeki" and "Higeki zuihitsu" are the collections of letters which Nariteru exchanged with his relatives and friends in Edo region during his residences in Ozaka. "Dojo kyokun shokan higen" is Nariteru's first book published in Ozaka at the age of 42.

Furthermore, "Dojo kyokun shokan higen"'s annotated edition was also be made.

研究分野：人文学

キーワード：国文学 日本文学 古典 近世 上方 大坂 江戸 東西

1. 研究開始当初の背景

報告者は、自身が研究代表者を務めた科研の研究課題「近世文人旗本の東西交信記録の研究」（研究種目 研究活動スタート支援、研究期間 平成二十八年（2016）八月～平成三十年（2018）三月、課題番号 16H07319）で、従来、伝存の報告がありながらも、全貌の紹介がなされず、資料としての性格も不明のままであった成烈の往復書簡集二種の校注作業を開始、①全文の入力、②原本の調査、③成烈略年譜の作成、④人名・書名・地名・重要語句への簡略な注釈、を行った。また、これまで未翻刻であった成烈の読本作品の翻刻などに携わった経験を持つ。

今回は、書簡資料の校注内容に増補改訂を加えて、研究の質的な向上を図りたい。また、これまでの成烈研究が、報告者によるものも含めて、読本作品の紹介や考察に偏りがちであったことを踏まえ、読本述作以前の教訓本作者としての成烈の一面や、成烈が生涯にわたって熱意を傾けた歌人としての一面にも及ぶ、総合的な研究を進めたい。以上のような関心から、本研究を立ち上げた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、成烈関連資料を可能な限り調査・収集・整理・分析し、未翻刻資料の本文の入力を実施・集積することにより、研究基盤の整備を図ることにある。具体的には、以下の作業に取り組む。

(1) 成烈書簡資料の校注

成烈には、安永二年（1773）十月から翌三年六月までの内容を収める『飛檄』（原簡の合綴本一冊、星槎ラボラトリー蔵）と、安永七年八月から翌八年七月までの内容を収める『飛檄随筆』（転写本三巻一冊、東京国立博物館蔵。異本に『飛檄帖』、転写本三巻三冊、早稲田大学図書館蔵）という、二種の往復書簡集が伝わる。既に入力済みの本文の点検を行うとともに、注釈内容の全面的な補訂に努める。また、書簡中に出てくる未翻刻資料の調査や本文の入力も併せて進める。

(2) 成烈編著書類の紹介

成烈には、江戸怪談文芸名作選第二巻『前期読本怪談集』（平成二十九年（2017）、国書刊行会）に翻刻が収められる読本『新斎夜語』（安永四年（1775）刊）および『続新斎夜語』（安永八年刊）のほか、教訓本『童女／教訓 松間鄙言』（明和四年（1767）刊）など、未翻刻の編著がある。それらの本文の入力を行い、紹介を試みる。

(3) 成烈をめぐる人物交流・書物交流の実態の解明

成烈は、大番組に所属していたため、定期的に上方へ派遣されて、その都度、任地に一年ずつ滞在する生活を、二十五歳から死没の六十六歳まで続けた、と見られる。その結果、本拠の江戸だけでなく、京・大坂・伊勢でも交際圏を形成、各地で文学的営為に携わっていた。その彩り豊かな交流の実態に光を当てる。

(4) 成烈作品の読解

成烈には、生前没後に刊行された編著や、未刊のまま写本で伝来した草稿類がある（上記（2）で紹介）。それらを考察の対象として、作品の措辞表現や依拠資料に注目しながら、また、書簡資料を最大限に活用しながら、創作の主意や工夫を明らかにする。

3. 研究の方法

上記「2. 研究の目的」に示した四つの作業のうち、（3）（4）は、（1）（2）の延長で行うものになる。よって、ここでは、（1）（2）に絞って述べておきたい。

(1) 成烈書簡資料の校注

現状では、一部の例外もあるが、語句ごとに簡略な注を付けている段階にある（中には、注が付けたくても、付けられていない箇所もある）。ここに関連資料の調査から得られた情報を付加し、詳細な注に発展させる。調査には、まず『日本随筆大成』『続日本随筆大成』などを用いる。また、一連の作業の過程で、入力本文に誤りなどが見付かった場合は、適宜、修正を施していく。

(2) 成烈編著書類の紹介

作業の大まかな流れを示すと、①国文学研究資料館ホームページ「日本古典籍総合目録データベース」を便りに、関連資料の所在を確認、②紙焼を収集（公開画像がある場合はそれを利用、紙焼が入手できない場合は出張してデジタルカメラで撮影）、③紙焼などをもとに本文を入力、④諸本調査を実施して書誌情報を採取、⑤底本に最適な伝本を選定、⑥異同などがある場合は逐一注記、⑦成立事情などを解明、⑧作品ごとに雑誌や紀要で研究成果を公表、となる。新規開設の文庫や図書館、古書店に伝本が収められる場合もあるので、そうした情報にも注意を怠らないように努める。

4. 研究成果

(1) 成烈書簡資料の校注

成烈が安永期(1772~80)の大坂在番中に江戸在住の親族朋友と交わした往復書簡集『飛檄』および『飛檄随筆』の校注作業に取り組んだ。また、一連の作業を通して得られた情報をもとに、成烈書簡集の魅力の発信に努めた。

①両書簡集の成立や伝来、注目される記事(たとえば、成烈の紀行に見られる歌学の教養、大坂在番中の大番士たちの日常生活、東海地域関連の逸話など)の紹介と考察を試みた。上記については、名古屋大学附属図書館友の会トークサロン第四十三回ふみよむゆふべ(平成三十年(2018)九月六日、名古屋大学附属図書館)で報告を行った。

②成烈は安永八年(1779)八月二十五日に摂津国の住吉社へ千二百首の和歌を持参、奉納を果たしている。この奉納和歌は、成烈ら大坂在番中の武家歌人とその近親者による詠作をまとめたもので、従来、その存在が報られていなかった(国文学研究資料館ホームページ「日本古典籍総合目録データベース」には未登録)。住吉大社に所蔵の有無を問い合わせたところ、同社にも同御文庫にも伝本はなく、奉納の事実を伝える記録も残らないという。そこで、関連資料の複写などを提供、情報の共有を図った。

(2) 成烈編著書類の紹介

成烈関連資料を調査・収集・整理・分析し、一部の資料については、全文を校訂するとともに、注釈を公表した。

成烈が四十二歳の明和四年(1767)六月に赴任先の大坂で世に出した、女子向けの教訓本『〈童女／教訓〉松間鄙言』について、『愛知淑徳大学論集—文学部篇一』第四十五号(令和二年(2020)三月、愛知淑徳大学)に書誌情報と校訂本文とを、同四十六号(令和三年(2021)三月、愛知淑徳大学)に注釈の前半部分を、同四十六号別冊(令和三年(2021)三月、愛知淑徳大学)に注釈の後半部分を、それぞれ掲載した。当初は、一連の作業を通して得られた情報をもとに解題を執筆、収録するつもりでいたが、実現できなかったため、それについては別途発展させたかたちで公表したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 ワクダ マサキ	4. 巻 45
2. 論文標題 文人旗本三橋成烈の女訓書『 童女ノ教訓 松間鄙言』（上）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 文学部篇	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ワクダ マサキ	4. 巻 46
2. 論文標題 文人旗本三橋成烈の女訓書『 童女ノ教訓 松間鄙言』（中）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 文学部篇	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ワクダ マサキ	4. 巻 46別冊
2. 論文標題 文人旗本三橋成烈の女訓書『 童女ノ教訓 松間鄙言』（下）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 文学部篇	6. 最初と最後の頁 147-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 ワクダ マサキ
2. 発表標題 近世文人旗本の東西交信記録『飛檄』を読む
3. 学会等名 名古屋大学附属図書館友の会トークサロン第四十三回ふみよむゆふべ（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ワクダ マサキ
2. 発表標題 『陰徳太平記』校正刷本の紹介と考察
3. 学会等名 東海近世文学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関